HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	ピアジェと現象学（その2）― メルロ＝ポンティとの論争をめぐって（2）―
著者	小島，康次; KOJIMA，Yasuji
引用	北海学園大学学園論集(111): 87-100
発行日	2023-03-15

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

開発論集　第111号　87-100（2023年３月）

ピアジェと現象学（その２）

―― メルロ＝ポンティとの論争をめぐって（２）――

小　島　康　次*

はじめに

本論は、「ピアジェと現象学―メルロ＝ポンティとの論争をめぐって」（小島、2021）に続いて、ピアジェ理論とメルロ＝ポンティを中心とする子どもの発達をめぐる現象学的アプローチとの論争に焦点を当て、議論の詳細を検討することを通じて、子どもの発達現象の理解を深める試みである。一般に、ピアジェ理論とメルロ＝ポンティの理論の論争は、科学的心理学対哲学的心理学の歴史の一コマとしてすでに決着がついた過去のできごととされることが多いように思われる。実際に明快な理論的整理がついたとは言えないまでも、1961年にメルロ＝ポンティが没すると、現象学の勢いは急速に弱まっていった。すでにもう一人の現象学の後継者サルトルが理論的立場を失った時期と重なったことにより、もはや現象学はあえて議論する相手ではなくなったのである。それに代わって時代を席巻したのは構造主義であり、こちらはピアジェ自身もその一員と自他ともに認める20世紀を代表する科学・哲学思潮だったと言っても過言ではない。しかし、ピアジェは構造主義者と自任しながらも、構造主義の主流からは距離をとり、そればかりか多くの構造主義者に対して論難するというスタンスを取り続けた。この議論の詳細については『迷走するピアジェ―本当に構造主義者だったのか？』（小島、2022）に論述したので、ここでは、現象学が構造主義に及ぼした影響の一つ、鏡像論についてミシェル・フーコーのエピステーメーを例として、必要最小限にとどめることにする。また、小島（2021）では、メルロ＝ポンティといわゆる人間学的心理学の系譜に多くの紙数を割いたことで、現象学自体の説明が手薄になったことを反省して、本論では、フッサールからメルロ＝ポンティにいたる現象学における理論的変遷と、特にメルロ＝ポンティが現象学から構造主義へのパラダイム転換に果たした役割についても言及することにする。

１．現象学とは何か―純粋論理学から現象学的還元へ、そして、生活世界論へ

1950年代のフランス哲学の主流は、現象学であった。言うまでなく、現象学はエドムント・フッサール（1859-1938）によって創始された哲学である。フッサールは最初、数学者として

*（こじま　やすじ）北海学園大学開発研究所特別研究員

研究人生を開始した。フッサールが学問の理想を数学という厳密で確実な方法に求めたことは自然なことだった。彼の基本的な哲学的関心は、あらゆる学問の確実な基礎づけを、個別の学問を超えた超越的論理学として定義することだったと言える。これはフッサールの初期の著作である『論理学研究』（第 1 版）（1900–1901）から後期の『形式論理学と超越論的論理学』（1929）までの著作に一貫して流れる主題だった。それは、晩年の著書『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』（1936）においても、西欧の諸学問の基礎づけを行うというテーマで一貫していることからもわかる。そうした理想を実現するための目標は、「事象そのものへ」（Zu den Sachen selbst!）という研究格率に端的に表明されているように、いかなる前提や先入観、形而上学的独断にも囚われずに、現象そのものを把握して記述する方法を探究することだった。フッサールはそれを「現象学」と名付けたのである。

フッサールが著作活動を始めた 19 世紀のヨーロッパは、後に「科学の世紀」「歴史の世紀」と呼ばれる時代であった。ガリレオ・ガリレイによって物理学の基礎づけに数学が導入されて以降、自然科学は飛躍的に発展したことは周知の事実である。その一方で、哲学は、個別学問を基礎づける「諸学の女王」の地位を追われた結果、諸学の学問的基礎づけを求めて、さまざまな研究が進められるようになった。そのような時代背景の下で、特に数学・論理学の領域で、心理学主義・生物学主義的な学問的背景から、心理的現象によって諸学を基礎づけようとする動向が活発になった。心理学主義とは、あらゆる対象の基礎を心理的な過程によって基礎づけようとする試みである。数学の研究から出発したフッサールの関心も、当初は心理学によって数学を基礎づけようとするものであった。『算術の哲学—論理学的かつ心理学的研究—』（1891）は、そのような立場から書かれた著書であり、この著書において、数概念を師のブレンターノから受け継いだ経験論的心理学の方法による基礎づけを試みたのである。

ブレンターノは、物理的原因から心理現象が発生することを理論的に説明する「発達的心理学」を批判して、心理現象が対象への「志向性」を持つ点で、物理現象と区別されるとして「記述心理学」の立場を明らかにした。そして、その上で「意識」が必ず対象を指し示すことを「志向的内在」を呼んだ。言い換えると、「意識」とは、例外なく「何かについての」意識であることを意味する。そこでは、デカルト的な心身二元論のように、「意識」がまず存在し、その後で対象が確認されるのではなく、「意識」と「対象」が常に相関関係にあるとされる。

しかし、心理学という「一つの理論」が前提とされるような方法では、現象そのものを直接把握することができないと考えたフッサールは、ブレンターノの理論の中の「志向性」概念を継承し、現象によって与えられる心的体験を直感的明証的に把握することをもって、あらゆる前提を取り払った諸学の学問的な基礎づけに新たに取り組んだのである。つまり、心理学主義が相対主義に陥ることに気づき、さらにフレーゲに批判された結果、方向転換をしたのが『論理学研究』第一巻（1900）の「プロレゴメナ」だった。これは、その多くが、さまざまな論理学の理論、とくに心理主義的な理論を批判することに捧げられたものであり、第二巻「現象学と認識論のための諸研究」（1901）に始まる本来の論理学研究の序説となるべき書物であると

される。この『論理学研究』はフッサールの前期を代表する著書であると言えよう（ただし、その約 10 年後に出版された第 2 版では、大幅な変更が加えられ、論議を呼んだ）。

ブレンターノの記述的心理学においては、志向対象とその「内容」が区別されていなかった。しかし、フッサールは、意識から生まれ出る「内容」を対象としてとらえたのである。たとえば、「丸い四角」という概念は、対象としては存在しない。しかし、それが内容として矛盾しているというように、意識から生じる意味は存在する。矛盾や背理法といった論理学の概念や法則は、いつでも、だれでも、どこでも、普遍的に共通するというイデア的な意味を有している。真の知は、普遍的な本質認識を求めるものであるため、単なる事実研究からは、偶然的な認識しか得られない。したがって、論理学の諸概念や諸法則のイデア的な意味をすべて取り出すためには、前提となりうるすべての理論を取り払った「直感」によって把握するしか方法がなく、その直感も完全に展開された明証的なものでなければならない。そのような方法によって記述される論理学は、「純粋論理学」である。純粋論理学が成立するためには、生きられた体験、記述、具体的なものに注目し、主観性に対して明確な優位を与える立場に立つ必要があった。

ここで、フッサールが目論んだのは、哲学をイデオロギーの段階から科学の段階へと移行させることだったと言えよう。しかし、現象学の発想の根本において、意識の可能性の条件をその対象との相関においてとらえるにあたって基礎となるのは、事実ならぬ本質なのだという点は、小島（2021）の末尾で論じたピアジェにおける科学性が、意識とは独立の事実から出発する途を取ったのとは対照的であると言えよう。フッサールとピアジェは、ともに科学性を重視し、認識論による基礎づけの必要性を主張しながら、まったく違った方向に歩み出したのである。フッサールにとって、認識論によって基礎づけられるということは、そのために現象学的な分析が必要であり、事あるごとに常に「事象そのものへ」と立ち返り、再生可能な直感との照合を繰り返すことによって、イデア的意味の不動の同一性を確保することを意味する。

いく分、スコラ哲学の趣を残すブレンターノの心理学は、アカデミックな心理学の座をヴントに譲り（小島、2021）、いったん、フッサールの現象学へ受け継がれることになったものの、心理学による基礎づけが、数学におけるイデア性あるいは普遍妥当性を基礎づけることと相容れないことから、『論理学研究』第一巻（1900）の「プロレゴメナ」において批判され、現象学からは放擲されることとなるのである。

中期のフッサールの現象学を一言で表すならば、「超越論的現象学」と呼ぶことができる。フッサールの中期を代表する著書は、『イデーン』Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ（1916 頃）である。フッサールは、初期の著書において現象学を記述心理学と位置づけて、あらゆる前提を取り払った純粋記述として、自我の心理作用を記述しようとした。しかし、それでもなお、意識を自我の心理作用として解釈する心理学的な「一つの解釈」を前提にしており、心理学主義との批判を受ける余地があった。そこで、フッサールは、そのような解釈も含めて、すべての解釈を遮断する方法として「現象学的還元」が、また現象学的還元を方法として得られる個々の純粋現象の本質

構造を明らかにする方法として「本質直感」の必要性を説くことになる。

現象学的還元（超越論的還元及び形相的還元）とは何か。我々は、日常的に自分の存在や世界の存在を疑ったりはしない。なぜなら、我々は、自分が「存在する」ことを知っているし、自分の周りの世界もそこに存在していることを知っているからである。フッサールは、この自然的態度を以下の３点から批判的に特徴づける。１．認識の対象の意味と存在を自明視していること、２．世界の存在の不断の確信と世界関心の枠組みを前提としていること、３．世界関心への没入によって意識の本来的機能を自己忘却していること、の３点である。このような態度の下では、人間は自らを「世界の中のひとつの存在者」として認識するにとどまり、世界と存在者自体の意味や起源を問題とすることができない。このような問題を扱うために、フッサールは、世界関心を抑制し、対象に関するすべての判断や理論を禁止する（このような態度を“エポケー”という）ことで、意識を純粋な理性機能として取り出す方法を提唱した。現象学において、エポケーは世界の自然命題を「カッコに入れる」ことを意味する。すなわち世界の外的現実についての信念をカッコに入れるのである。ただしこれは世界の実在を疑うという意味ではない。世界の現象を起こるに任せ、純粋な現れとし、そこで現れているものの実在については一切判断しないということである。世界の中で生きられたものが意味しているすべてを捨象し、生きられたものをそのものとして研究するという点において、エポケーは意識の普遍的構造を考えるための第一歩なのである。エポケーの次の段階である「現象学的還元」によって得られた、自然的態度を「純粋意識」という。

既に述べた通り、「意識」とは、例外なく「何かについての」意識であり、志向性を持つ。したがって、純粋意識の純粋体験によって得られる純粋現象も、志向的なものである。そして、このような志向的体験においては、意識の自我は、常に何かについての意識として、意識に与えられる感覚与件を何とかしてとらえようとする。フッサールは、ギリシア語で思考作用をさす「ノエシス」と、思考された対象をさす「ノエマ」という用語を用いて、意識の自我が感覚与件をとらえようとする動きを「ノエシス」、意識によって捉えられた限りの対象を「ノエマ」と呼んだ。現象学的還元によって得られる純粋現象は、あらゆる学問的解釈のみならず、一般的な人間の日常的な自然的態度さえも遮断して得られるものである。しかし、それだけでは、個々の諸現象が得られるだけである。真の学は、普遍的な本質認識を求めるものである。したがって、そのためには、純粋現象の本質構造を明らかにする方法が必要とされる。

フッサールは、既に『論理学研究』において、感覚的直感を超える直感があることを論じている。本質的直感とは、知覚された個別の対象をモデルとして、それを超えて諸対象に共通の普遍的な本質を取り出して、「原本的に与える」直感とされる。現象学的還元によって得られた志向的諸体験のノエシス／ノエマ的類型的構造の本質を直感するところにより記述すると、現象学的還元によっていったんは遮断された自然的世界及びすべての理念的諸世界の対象を純粋意識が自分の中で「世界意味」として構成することになる。このような純粋意識は、すべてを超え出た「超越論的な純粋意識」ないし「超越論的意識」と呼ばれ、以上のような反省を得

た「超越論的現象学」は、デカルト以来の二元論の持つ問題、主観的な認識主体が自己を超え出た客観的世界をどのように認識し得るのかという難問を解決した上で、正しく認識論的に基礎づけることによって、諸学の基礎づけを行うものとなるという。

さて、後期思想の集大成とよぶべき著作が『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』（1936）であり、『デカルト的省察』（1931）にその思想的転換が認められるとされる。そこでは、超越論的現象学によって明らかにされた個々の純粋意識の志向的体験を超えて、それに先立って存在する「先所与性」が存在し、それが発生する起源にまで遡らなければ、世界構成を徹底的に明らかにすることはできないとされ、超越論的現象学の「静態的現象学」から「発生的現象学」への段階移行が説かれる。『危機』において、フッサールは、普遍的な本質認識を求める真の学は、古代ギリシアにおいて、理性によって世界の全体を体系的に把握する普遍学として創設されたとする。そこでは、学問以前に日常的に直感される「生活世界」（Lebenswelt）の基盤において、真の学が成立していた。ところが、ガリレオ・ガリレイによって物理学の基礎づけに数学が導入されて以降、自然は数式によって理念化されて「数学的・記号学的理念の衣」によって被われてしまったという。その結果、生活世界は隠蔽されてしまったのであった。これが「ヨーロッパ諸学の危機」の中身である。そして、フッサールは、超越論的現象学によって「すべての客観的学問」をエポケーして生活世界を取り戻すことを主張したのである。

２．メルロ＝ポンティによる現象学と構造主義の架橋
―レヴィ＝ストロースとの出会い

フランスにおける現象学は、サルトルの現象学（実存主義）とメルロ＝ポンティの現象学に二分される。前者は、意識、しかもそれ自身にとって透明なものとしての意識に力点をおくものだった。他方、メルロ＝ポンティの場合は、同じくフッサールの構想を受けつぎながらも、それに異なる方向づけを与え、むしろ、言葉であらわされる意味と事象においてあらわになる意味とのあいだの弁証法を明らかにすることを目指すものだった。特にメルロ＝ポンティの場合、現象学者にあらわれる経験の与件から、科学的思考として受け継いだ一切の原則を一掃するというフッサールの考えを引き継ぐ。そこで言われるのは「現象学は何よりもまず科学の否認である。」という一見、とんでもないテーゼに思われるものである。しかし、これは、科学をただ単に全否定してしまうことでは決してない。そうではなく、科学をあらためて哲学的思考のなかに取り戻すことだったのである。これは、ピアジェが認識論を哲学からもぎ取って、科学にするという発想と真逆の方向性であると言えるかもしれない。

実は、メルロ＝ポンティはそうした方向の作業を従来から行っていたのであり、生物学、とくに心理学を対象として、それらにつきものの物象化と機械論への傾斜を批判してきたのである。一方で、純粋な意識をめぐる観念論に対しては懐疑論的な視点をとり、新たな人間諸科学

が提示するさまざまな意味作用の構造への関心を強めていった。メルロ＝ポンティには哲学と人間諸科学との間に一種の相互補完的関係を構築するという野心的なねらいがあったと考えられる。

1960年にメルロ＝ポンティは一冊の重要な著作『シーニュ』（1960）を刊行した。ここには1951年に発表した諸論文が再録されている。メルロ＝ポンティはそこでソシュールの仕事を次のように高く評価する。それが有名な恣意性である。つまり、記号一つひとつは何も意味せず、記号同士の差異こそが意味を生み出すという発想である。そして、哲学と社会学が隔絶されたままの状態を解消とし、それらの間の共同作業の必要性を説いている。なぜなら哲学者の使命は、社会科学によってなされた経験的研究を解釈することだからだという。つまり、哲学者は解釈学的研究によって、実証研究に意味への問いをもたらすのが主たる仕事なのである。一方、哲学者は実証科学を必要ともしている。というのは、哲学者が推論をおこなう際には、科学的手続きによって妥当性を保証された事実にもとづくしか方法がないからである。

メルロ＝ポンティは、「哲学者と社会学」において、社会学が人間の科学を代表する学問の一分野として「哲学」と対置されているとし、20世紀に入ってから、哲学と社会学は互いに分離し、それまでの交流を拒否し合う関係になったという。その結果、哲学的諸観念と社会学的事実とは互いに行き来することもなくなったとされる。このことは哲学にとっても社会学にとっても不幸なできごとだった。なぜなら、社会学は哲学なしに済ませることができないからである。社会学者はその研究対象に関する事実を収集し、記述するだけでなく、それがわれわれの生にとって持つ意味を了解しようとする限りにおいて、何らかの哲学を必要とするからである。社会学が哲学から完全に独立することがあるとすれば、それは社会学が研究対象を人間にとっての意味の理解から離れる時でしかない。メルロ＝ポンティは、このことを社会学だけでなく、科学一般に当てはまることを示したのである。

他方、現実から離れ真理の世界を探求するように見える哲学者にとっても、人間についての科学なしに済ませることはできないのである。メルロ＝ポンティによれば、哲学者も社会学者あるいは科学者と同様、われわれが経験しているこの世界について思考する以外に真理の探究を行うすべを持たない。したがって、メルロ＝ポンティにとって、科学と哲学とは峻別できるものではなく、相互に依存し高め合う関係にあるものだった。

メルロ＝ポンティはサルトルと袂を分かったのち、レヴィ＝ストロースに接近する。彼は、『シーニュ』の第4章を人類学に当て、「マルセル・モースからレヴィ＝ストロースへ」というタイトルで、レヴィ＝ストロースが「マルセル・モースの業績解題」（1950）の中で初めて表明した構造主義のプログラムを熱烈に支持する一文を著した。曰く「社会的事実とは物でもなければ、観念でもない。それは構造である。…構造はいささかも社会からその厚みや重みを取り去るものではない。構造それ自身が、もろもろの構造の中の一つなのであるから。」レヴィ＝ストロースとメルロ＝ポンティの友情の絆が固く結ばれたことはよく知られている通りである。

メルロ＝ポンティが追求した学問的目標はどのようなものだったのか。現象学哲学の果たすべき役割とは何か。レヴィ＝ストロース、ソシュール、フロイトの業績を引き受けた上で、そこからもたらされる素材すべてを哲学の観点から規定し直すこと、言い換えれば現象学的に把握し直すことだった。その場合、哲学者たるメルロ＝ポンティは、自身で真偽を確かめることのできない専門家の議論をまずは受け入れ、しかる後、それらに主観的経験、全体的意味作用といった観点からの意味を充当する作業が必要だと考えた。例えば、レヴィ＝ストロースの親族に関する説を、彼は「親族の代数学」のようなものとして受け入れ、そこに親子関係や出自などの家族的なものが人間にとってもつ意味を充填してやる必要があると考えたのである。それはいわば理性に先立つもの、あるいは理性を超えたものをも哲学の地平上に位置づける試みだったと言える。それは、狂人と野蛮人という近代社会における非合理的な存在に対して、精神分析と人類学という二つの学問領域を対峙させることによって了解可能なものとしようとしたことに如実に表れている。喩えて言えば、個別学問を楽器のパーツとするならば、現象学者は、オーケストラ全体を統括する指揮者のような役割を演じるべきだと考えたのである。どのような音源であれ、それらを無意味な音として放置するのではなく、音楽として意味づけることを自らに課したのだと言えよう。

しかし、この画期的な構想は、残念ながら長くは続かなかった。もっとも分かり易い理由は、このプログラムを一身に体現していた人物のあまりに早い死であった。メルロ＝ポンティは 1961 年 9 月 4 日、上記の途轍もない構想の素描だけを残してこの世を去った。45 歳の若さだった。しかし、より根本的な理由があったという見方がある。それぞれの学問分野がすでに自分自身の概念構造に取り組んでいた、というのがもう一つの有力な見方である。人間諸科学は自分自身の発見に対して意味を与えるのに、哲学者（勿論、メルロ＝ポンティもこの中に入る）の力を借りる必要がなくなったからだという。メルロ＝ポンティの構想は、社会諸科学を目指す者達をして、自ら新たな問題設定に目覚めさせる結果となり、また、現象学者の多くが、まさにメルロ＝ポンティの影響の下、人類学者や言語学者や精神分析家となる途を選んだのである。メルロ＝ポンティは、いわば、自らが載っている枝を自分で切り落としてしまったのだ。

３．現象学から構造主義へのパラダイム転換―フーコーを例として

個人心理学で著名なアルフレッド・アドラーは 1952～3 年ごろ、ソルボンヌの哲学の学生だった時代にメルロ＝ポンティの著作を発見し、精神分析、児童心理学、言語に関する理論問題に関心をもつようになったという。ラカンがメルロ＝ポンティを介してソシュールを知るようになったことも確かなようである。構造主義言語論の泰斗グレマスも、構造主義におけるメルロ＝ポンティの重要性を認める一人である（Greimas, A. J., 1966［1988］）。コレジュ・ド・フランスでの講義（1952 年）で、メルロ＝ポンティは、「いずれ歴史の哲学を作り出したの

は、マルクスではなくソシュールだったことがわかる時が来るだろう」と言ったとされる。つまり、メルロ＝ポンティは意図せず、現象学の次のパラダイムである構造主義への露払いをしたとも言えるのである。メルロ＝ポンティには、理論的な構想力だけでなく、その人間力を感じさせる興味深いエピソードにも事欠かない。構造主義の第一人者レヴィ＝ストロースの机上にはメルロ＝ポンティの写真が飾られていたという。また、カリスマ的な精神分析家ラカンは、メルロ＝ポンティの訃報を受けた時、涙を流し、彼のセミネールでも弔辞を述べたという。彼らの間に学問上の繋がり以上の濃密な関係があったことを示す逸話ではないだろうか。

構造主義者としてばかりでなく、ポスト構造主義者としても名高いラカンの初期の理論を代表する「鏡像段階」論は、ワロンやフーコーと同様、現象学からヒントを得たものだと考えられる。現象学は、人間を認識される対象としてではなく認識する主体であるとし、したがって、認識する審級が自己認識に達するには、視線とその先の自己像（鏡像）を隔てる不可視の関係性が必須であるという事実を強調していたからである。現象学本家本元のメルロ＝ポンティがラカンの論考「〈私〉機能を形成するものとしての鏡像段階」（『エクリ』1966［1972］、所収）から鏡像論の着想を得たのは皮肉なことである。メルロ＝ポンティは、さらにそれを掘り下げて、ワロンの言う「癒合的社会性」を乗り越えるための契機としたとされる。癒合的社会性とは、幼児における対人関係において、自己と他者とが未分化な融合状態にあることを表す概念であるが、メルロ＝ポンティはラカンの論考に倣って、鏡像による〈私〉の形成を、自他の分化、すなわち自己の「存在」の発見としてではなく、「不在」への気づきとして定式化したのである。

現象学を発展させるべく大いなる努力を傾けながら、それによって多くの現象学者の転向を促し、哲学の弱体化を招いた立役者メルロ＝ポンティが早逝し、何とか最後の砦に踏み止まったかに見えた現象学の哲学には、その後、さらなる悲劇が待ち受けていた。またしても哲学界の内側から出てきたアンチ・ヒーロー、ミシェル・フーコーの登場である。1960 年代は現象学の哲学にとって受難の時代だったと言っても過言ではないだろう。現象学の目標が、生きられた経験を内側から記述するというものだったのに対して、フーコーは、それを逆転させて、問題系を社会的実践や制度の解明へと目を向けた。

彼は、処女作と目される『狂気の歴史』（1961）の中で、西欧の歴史における狂気の意味の変遷について考察し、同時に、歴史の理念及び歴史学研究法に対する批判を行った。その際、社会構造の影響の記述のために現象学の概念を用いてはいたけれども、すでに構造主義的なフレームワークの中にあったと評価される。その背後に、主体ではなく、時代を特徴づける認識系（エピステーメー）の存在があることは次節で詳しく論じることにする。

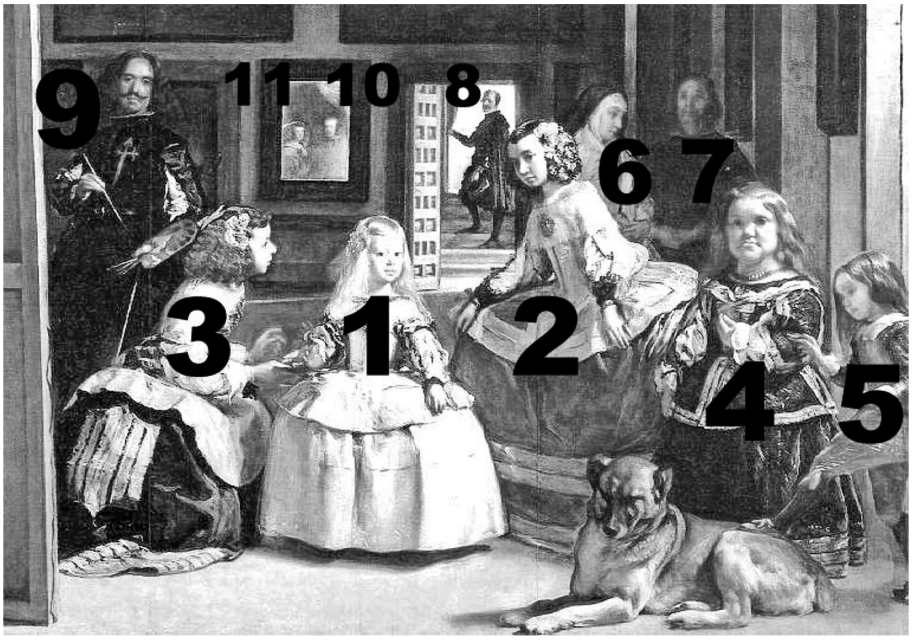
岡本（2015）によれば、実は、フーコーには、処女作とされる『狂気の歴史』以前に、『精神疾患とパーソナリティ』（1954）という著作があり、それは、後年、一部を大幅に改変されて『精神疾患と心理学』（1962）という著書として装いを新たに刊行し直されたという。そして、実質的な初めての著書『精神疾患とパーソナリティ』は、いわばお蔵入りにされてしまっ

たという。理由は、フーコー自身の内部で生じた理論的転換のためだったと解される。つまり、『狂気の歴史』は、フーコーにとって、構造主義的な立場への新たなマニフェストだったのである。それ以前のフーコーは、現象学の発展形である実存的人間主義にどっぷり浸かっていた。フーコーが『精神疾患とパーソナリティ』において「狂気」を問題にする際のキーワードは“疎外”という概念だった。この概念は、精神病理学的には精神錯乱を意味するという。フーコーはさらに、精神疾患の条件を規定する三つの“疎外”、すなわち、疎外の法的な面と社会的な面と人格的な面について論じるのである。法的な疎外とは、患者の法的能力が他人に移管されることであり、社会的な疎外とは、患者が社会から排除されることであり、人格的な疎外とは、患者が自分のもっとも人間的なものを失うことであるとされる（岡本、2015）。

疎外概念は、マルクスがヘーゲルから受け継いだものであり、初期のマルクスの著作『経済学・哲学草稿』におけるもっとも重要な概念の一つだったことはよく知られている。フーコーの精神疾患における疎外論は、このマルクスの資本主義社会における人間の疎外の問題を継承したものであると考えられる。精神疾患の条件を歴史的、社会的な条件に求めるとすれば、それを克服することが病から回復する方途であることになる。言い換えればそれは疎外を脱し、人間的な実存を取り戻すことが課題だということになる。しかし、精神疾患の原因と課題を「疎外」に焦点を当てて説明しようとすると、前提として疎外されていない「真の人間性」を措定しなければならないことになる。つまり、「真の人間性」→「人間性疎外」→「人間性の回復」という論理が成り立つことが前提とされる。しかし、この真の人間性なるものを無条件に前提とすることができるだろうか。後にフーコーが批判の矛先を向け、「人間の死」を宣告した近代のエピステーメー「人間」を彷彿とさせる観念を野放しにしておくことはできなかったのであろう。

『狂気の歴史』において用いられた「疎外」という概念は、『精神疾患とパーソナリティ』における「疎外」とは異なり、フーコーによって換骨奪胎されたものだという。『狂気の歴史』の原著の表題が「古典主義時代における狂気の歴史」だったことから、この著書で扱われた狂気は、古典主義時代、すなわち 17 世紀半ばから 18 世紀後半までの時代におけるものだったと考えられる（岡本、2015）。フーコーによる時代区分からすると、中世・ルネッサンス期→古典主義時代→近代（現代）ということになり、啓蒙主義の時代と重なる古典主義の時代は、「理性」に対する信頼が、信仰に近いほど重視された時代だった。そこでは、当然のように非理性的なものは従属的な地位に貶められ、排除される結果となる。しかし、『精神疾患とパーソナリティ』における疎外論とは違って、もはや、「人間性の回復」が語られることはない。ここでフーコーが疎外（狂気）を取り上げるのは、メルロ＝ポンティの顰にならってレヴィ＝ストロースが「未開人（野蛮人）」を西洋文明と異質なものとして描き出したのと軌を一にする、まさに構造主義的な発想によるものなのだと考えられる。『狂気の歴史』がレヴィ＝ストロースの『悲しき熱帯』（1955）が出版されたすぐ後だったことは、偶然ではないだろう。

現象学がもたらした鏡像による自己の発見という秀逸な発想は、ラカンばかりでなく、フー



前景の中央には、マルガリータ王女(1)が立っている。この時点では王女は5歳で、フェリペ4世と王妃マリアナの間に生まれた最初の子どもである。王女は2人の侍女にかしずかれている。お辞儀をしようとしているのがイサベル・デ・ヴェラスコ(2)、ひざまずいて金のトレイの赤いカップを王女に勧めているのがマリア・アグスティナ・サルミエント・デ・ソトマイヨール(3)である。王女の右側には、2人の小人がいる。ドイツ人マリア・バルボラ(4)と、イタリア人のニコラ・ペルトサート(5)である。ニコラはふざけて、足元のマスティフ犬を起こそうとしている。彼らの後ろに立った王女のシャペロン、マルセラ・デ・ウリョーア(6)は喪服を着ており、名前不詳の目付役(7)に話しかけている。後部右側には、ドン・ホセ・ニエト・ベラスケス(8)が立っている。彼は1650年代、王妃の侍従であり、王室のタペストリー工場の長でもあり、画家の親戚であった可能性もある。ニエトは右の膝を曲げ、足を別の段に置いて立ち止まっている。国王夫妻の姿は鏡に映っており、反対方向すなわち絵の前方に立っている。遠近法における消失点はドア付近にあり、右の壁と天井との接線を延長することで位置を求めることができる。ニエトを視界に入れているのは王と王妃だけであり、鑑賞者は前景の人物ではなく、国王夫妻の視線を共有することになる。ベラスケス自身の姿(9)は画面左に描かれ、イーゼルに支えられた大きなカンバス越しに、こちらを見ている。背後の壁の鏡に上半身が映っている2人は、フェリペ4世(10)と王妃マリアナ(11)だと確認されている。一般的には、ベラスケスは国王夫妻の肖像を描いているところで、鏡に映った夫妻の像は絵のポーズをとっているところ、そして夫妻の娘がそれを見ているところ、と仮定されている。つまり『ラス・メニナス』は、国王夫妻からの視線で描かれているのである。

図と解説（ベラスケス作『侍女たち』1656年、プラド美術館蔵）

コーやメルロ＝ポンティにまで影響を及ぼした。にもかかわらず、現象学は、その人間学の円環から抜け出す方途を見出せないまま終焉を迎えることになる。対するフーコーは、『言葉と物』（1966）の中で、そうした円環の根本的な乗り越えを提案したのである。経験的なものと超越的なものの区別を維持しながら、「生きられたもの」という観念を通して、それらを同時に解明しようとする現象学の試みは、誤りとは言えないまでもかなり無謀なものだったのかも

しれない。果たして「人間」は本当に存在するのか、西欧のヒューマニズムは、存在欠如の場である「人間」を中心に据えることで自己満足に陥っていたのではないか、といった疑問が噴出することになる。フーコーをはじめとする当時の構造主義者による厳しい批判にさらされて、20 世紀前半の主役だった現象学は静かに表舞台を退いたのである。

４．「表象としての鏡像」―古典主義時代のエピステーメー

フーコーが 1966 年に刊行した『言葉と物』は、彼がもっとも構造主義的な段階に著された代表作であり、西欧文化の歴史的段階における思考されざるものの様態を異質なエピステーメーの継起として捉えた名著である。この著書の冒頭第１章で言及されたベラスケスの絵画作品『侍女たち（ラス・メニナス）』（「図と解説」P.96 参照）に関する言説は、「鏡像」のもつ表象的な意味合いから、いかにして人間不在の「鏡像」が生じるかを巧みに論じた論考である。

この絵の中には、ほぼ中央に王女マルガリータが、その周りには侍女や侍従、そして当時有名だった宮廷道化師や小人が描かれている。これは宮廷画家であるベラスケスが、命じられて王女の肖像を描いた場面だと考えられる。宮廷画家というのは、王やその家族の肖像を描くのが仕事だから、ベラスケスが王女とその侍女たちを描いたのはごく自然な行為である。しかし、よく見ると、この絵には不自然なところが幾つか見られる。画面左端には巨大なキャンバスの裏面が見えており、その表面の先のほうには、マルガリータや侍女のいる場所よりもさらに後ろのほうに、ベラスケスと思われる画家が、キャンバスの手前、つまりこの絵の観客のいる方向を見つめているのである。もしこの絵のテーマが王女マルガリータと侍女たちを描くことであったとしたら、画家が絵の中に登場するのは不自然である。なぜなら、画家は、絵の外側にいて、そこから王女らを眺めねばならない立場にあるからだ。画家がモデルである王女たちと同じ平面に共存することはありえないのだ。もう一つ不思議なことがある。絵の中の画家が見つめているらしいものを、マルガリータもまた見ているらしいことである。マルガリータのほかに、道化もまたその方向を見ているようだし、画面の奥で、階段に片足をかけた男もまた、その方向を見渡しているようにも見える。この男の場合には、王女や画家のいる部屋の空間全体を眺めていると解釈できないわけではないが、その視線が、画面の手前の方向に向かっていることは間違いない。こんなことから、この絵を見るものは、画家や王女の視線の先、ということは観客自身が立っているその場所の方向に、彼らの注意を引いている対象があるのだと推論できる。そこで、この絵の中には、その場所に誰がいるのか、推測の手がかりになるような要素があることに、観客は気づかされる。画面の奥の壁面にいくつかの絵がかけられているが、そのうちの一枚がひときわ明るくなっている。これは実は鏡であって、その鏡に映っている一組の男女すなわち王と王妃こそ、この絵の中の人物たちの視線の先にある当の対象なのだということに気づかされる。鏡に映ったこの一組の男女、スペイン王フェリペ四世と王妃マリアナは画面の外側にいてポーズをとっているのだろう。それを画面の中にいるベラスケス

が、やはり画面に半分姿を現しているキャンバスの上に描いているところである。この絵は、折しも画家の前でポーズを取っている王と王妃の姿を、王女マルガリータや侍女たちが見守っているところを描いているわけだ。描かれている当のモデルである王と王妃は、画面の中では、奥の鏡の中に、間接的に現れているに過ぎないが、絵全体は、彼らのいる方向に向かって、直接的に視線を延ばしている。通常絵を見る際の視点と言うものは、絵の外部にあって、そこから絵の内部へと視線が向かうものなのだが、この絵ではそれが逆になって、絵の内部から絵の外部へと視線が向かっているわけである。

この著作の第二章以降でフーコーが展開しているのは、古典主義時代以降のエピステーメーについての議論なのだが、それとベラスケスのこの絵とが、どのようなかかわりがあるのか。また、この部分（第一章）で展開されている議論が、それ以降に展開されることとなる議論とどのようなつながりを有しているのかという謎が投げかけられる。この謎の前半の部分については、ベラスケスがバロック時代の作家だったということが、解決の一つの糸口になるだろう。美術史上バロック時代というのは、ルネサンスと古典主義時代に挟まれた過渡期の時代である。これは、フーコーのエピステーメー論の議論では、中世・ルネサンスのエピステーメーから古典主義時代のエピステーメーへの転換期ということになる。フーコーはだから、ベラスケスのこの絵の中に、そうした転換期の特徴を見出し、その特徴の解明を足がかりにして、本題である古典主義時代のエピステーメーの議論へと進む心積もりだったのではないかと考えられる。というのは、第二章における次のような叙述がルネッサンス期までのエピステーメーについて述べているからである。

「16 世紀末までの西欧文化においては、類似というものが知を構築する役割を演じてきた。テクストの釈義や解釈の大半を方向づけていたのも類似なら、象徴の働きを組織化し、目に見える物、目に見えぬ物の認識を可能にし、それらを表象する技術の指針となっていたのもやはり類似である。」

さらにこうしたエピステーメーは 16 世紀末には終わりを告げ、新たな時代、すなわち古典主義の時代が始まる。その移行期が、ベラスケスが活躍したバロック時代であり、17 世紀初頭、それまでの類似関係を中心とした思考が終わり、「相似」はもはや知の形式の主流ではなくなる。フーコーがこの章（第一章）で展開している議論は、単純化して言えば、視線の複数性ということだろう。この絵には、絵の内部から絵の外部に向かっている視線と、絵の外部から絵の内部に向かっている視線とがあって、この二つが複雑に交差している。普通、絵というものは、絵の外部にいる画家の視点を中心にして、そこから一つの方角へと向かう視線に貫かれているものだが、この絵の中では、そうした特権的な視点である画家の視点が絵の内部にあるために、通常の絵の受け止め方ができないのである。

この絵を見た人が現代人であれば、常識からはずれた奇妙な絵というふうに受け取りたくなる。しかし、それは、現代に支配的なエピステーメー、すなわち、主体的人間の視点に依拠するからそういうことになるわけで、ベラスケスにとっては、少しも不自然ではなかった。彼に

とって、絵を構成する視点は、一つである必要はなかったのである。というより、視点にこだわること自体に意味を見出していなかった。視点を考慮からはずした、純粋な表象の同一性と相違性を楽しむということこそ、彼がこの絵を通じて主張していたことかもしれない。また、そうした主張は、表象の秩序化にこだわる古典主義時代のエピステーメーの特徴でもあったから、ベラスケスは未だバロック時代にいながら、古典主義時代のエピステーメーを先取りしていたというふうにフーコーは解釈しているのだと思われる。ベラスケスと古典主義時代のエピステーメーとが、表象の戯れを通じて結びついていることを、フーコーはこの章の末尾で次のように言っている。

「おそらくベラスケスの絵の中には、古典主義時代における表象関係の表象のようなもの、そしてそうした表象の開く空間の定義があると言えるだろう。事実、その表象は、そのあらゆる要素において、すなわち、イメージ、それが身をさらしている視線、それが目に見えるものとしての顔、それを生み出している動作とともに、自己をこの絵の中で表象しようと企てているのだ。だが、そこでは、表象がその全体を結集するとともに展覧する、こうした分散状態のなかで、いたるところから厳然としてひとつの本質的な空白が指示される。その空白こそ、表象を基礎づけるものの消滅―表象がそれと類似する者と、その眼には表象が類似物にすぎぬところの者との、必然的な消滅にほかならない。この主体そのもの―それは同じひとつのものである―が省かれているのだ。そして、自分を鎖でつないでいたあの関係からついに自由となって、表象は純粋な表象関係として示されることができるわけである。」

この文章は。主体なき表象こそが古典主義時代の特徴だと主張しているように読める。ここでいう主体とは、「人間」のことである。主体なき表象とはだから、人間不在の表象ということになる。一読、分かりにくいのは、我々現代人が、近代以降、人間と言うものを当然の前提としてものを見ることに慣れてしまっているからであって、その点では、時代のエピステーメーに制約されているわけである。古典主義時代には、人間という概念が存在しなかったのである。人間が操作概念として前景に出てくるのは、近代に入ってからのことだというのがフーコーの基本的な主張なのである。「18 世紀末以前に《人間》というものは実在しなかったのである。……《人間》こそ、知という造物主がわずか二百年たらず前、自らの手でこしらえあげた、まったく最近の被造物にすぎない」フーコーは、この著作の第九章で再びベラスケスに言及し、ベラスケスの「侍女たち」の中に、古典主義時代の表象の仕組みが先取りされて、鮮やかに描き出されていることを確認する。

前項で論じたように、フーコーは、近代以降の時代のエピステーメーとして《人間の死》を措定したことは繰り返すまでもないだろう。我々は、現代の思想状況にあって、いまだ近代の残滓を引き摺りながら、構造主義からさらにポスト構造主義という混沌の中に投げ出されていると言えるかもしれない。

参考文献

岡本裕一郎　2015『フランス現代思想史―構造主義からデリダ以後へ』中公新書

Greimas, A. J. 1966 *Semantique Structural: Recherche de Méthode.* Librairieie Larousse, Paris,〔グレマス、アルジルダス・ジュリアン（田島宏・鳥居正文訳）　1988『構造意味論―方法の探求』紀伊國屋書店〕

小島康次　2021「ピアジェと現象学―メルロ＝ポンティとの論争をめぐって」『北海学園大学開発論集』107 号

小島康次　2022「迷走するピアジェ―本当に構造主義者だったのか？」『北海学園大学経営論集』第 20 巻 4 号経営学部開設 20 周年記念号

Foucault, M. 1961 L'Histoire de la folie à láge classique.〔フーコー、ミシェル（田村俶 訳）1975『狂気の歴史』新潮社〕

Foucault, M. 1966 *Les Mots et les. Choses* Gallimard〔フーコー、ミシェル（渡辺一民・佐々木明 訳）1974『言葉と物―人文科学の考古学』新潮社〕

Foucault, M. 1966 *Maladie Mentale et Psychologie*. Presses Universitaires de France〔フーコー、ミシェル（神谷美恵子 訳）　1970『精神疾患と心理学』みすず書房〕

Husserl, E. G. A. 1891 *Philosophie der Arithmetik: Psychologische und Logische Untersuchungen.* Erster Band〔フッサール、エドムント（寺田彌吉訳）　1933『算術の哲学―論理学的かつ心理学的研究―』モナス〕

Husserl, E. G. A. 1900-1901 *Logische Untersuchungen.*〔フッサール、エドムント（立松弘孝・松井良和ほか訳）　2015『論理学研究』みすず書房〕

Husserl, E. G. A. 1929 *Formale und transzendentale Logik.*〔フッサール、エドムント（立松弘孝訳）2017『形式論理学と超越論的論理学』みすず書房〕

Husserl, E. G. A. 1931 *Cartesianische Meditationen.*〔フッサール、エドムント（浜渦辰二訳）　2001『デカルト的省察』岩波文庫〕

Husserl, E. G. A. 1936 *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie.*〔フッサール、エドムント（渡邊二郎・立松弘孝ほか訳）　1979-2010『純粋現象学、及び現象学的哲学のための考案（イデーンⅠ・Ⅱ・Ⅲ）』みすず書房〕

Husserl, E. G. A. 1936 *Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendentale Phänomenologie.*〔フッサール、エドムント（細谷恒夫・木田元訳）　1995『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』中公文庫〕

Merleau-Ponty, M. 1960 *Signes.*〔メルロ＝ポンティ、モーリス（竹内芳郎訳）　1969-1970『シーニュ』みすず書房〕

Lacan, J. 1966 *Ecrits.* Seuil.〔ラカン、ジャック（宮本忠雄・竹内迪也・高橋徹・佐々木孝次訳）1972『エクリⅠ』弘文堂〕

Levi-Strauss, Cl. 1955 *Tristes Tropiques.*〔レヴィ＝ストロース、クロード（川田順造 訳）　1977『悲しき熱帯』中央公論社〕